

〈報告書〉

学生生活と就職活動の振り返り

— インタビュー調査から見たキャリア探索 —

湯 口 恭 子*

Reflections on Job Hunting and Student Life ; Career Exploration through Interview Surveys

(YUGUCHI Kyoko)

1. 問題と目的

(1) はじめに

少子化や社会経済状況の変化、高学歴志向等を背景として大学進学率が上昇した。一方、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学する者の増加等が報告され、大学生のモラトリアム傾向も指摘されている（文部科学省，2004）。学校生活の後半になると、生殖器官の成熟という身体の生理的变化や、大人としての役割に移行していく不安などに悩みながら、アイデンティティを確立する時期でもある（Erikson, 1969）。そのため、青年期は子どもと大人の間にある不安定な境界期とされ、もっとも心理的混乱が起こりやすい（下山，1998）。アイデンティティの確立は、どのような生き方を選択するのかといった職業や進路選択とも深く関わっているとの指摘もある（若松，2012）。このように、大学生は心理的混乱を抱えつつ、生き方の選択を迫られる段階にあると言える。

キャリア探索は、自己および職業、仕事、組織などの情報収集を目的とし、社会生活への移行に関りを持つ探求活動と定義される（Jordaan, 1963; Stumpf, Colarelli, & Hartman, 1983; 安達，2008）。情報源としては「環境探索」（職業や仕事など社会の情報を収集する）、「自己探索」（自分自身について振り返り、より深く理解する）（Stumpf et al., 1983, Zikic & Klehe, 2006）の2つがある。キャリア探索は、進路選択自己効力や内発的動機づけ（Blustein, 1989; 安達，2010）、未来への希望（Hirschi, Abessolo, & Froidevaux, 2015）、キャリア・レジリエンスと正の関連があることが示唆され（湯口，2020a）、大学生のキャリア選択と関わっ

*近畿大学働き方改革推進センター講師 〔キーワード〕 キャリア探索、就職活動、学生生活、インタビュー、振り返り

て満足度を高めることが報告された (Jordaan, 1963; Stumpf et al., 1983; 竹内, 2012)。職業選択への取り組みを促進する役割においても、特に青年期後期のキャリア探索が重要との考えが示された (Blustein, 1989)。個人のキャリア開発における重要段階として、学校から職場への移行にキャリア探索は関連しているとの報告 (Savickas, 1997; Zikic & Hall, 2009) もある。キャリア探索と進路未決定との関連では、意思決定に遅れのある学生が納得のいく意思決定を行うには、探索行動が不可欠としたものがある。(若松, 2012)。

国内研究において、キャリア探索の因子構造も報告されている。「情報収集」「自己内省」「外的活動」(若松, 2006)、「情報収集」「自己理解」「他者から学ぶ」(安達, 2010)、「情報収集」「自己理解」「キャリア支援活用」(湯口, 2020a, 2020b) であり、おおむね3因子構造と考えられる^(注1)。

このように、近年、キャリア探索の研究は蓄積されつつある。青年期において納得のいくキャリア選択を行うには、キャリア探索が必要不可欠といえることができるだろう。

(2) 学生生活とキャリア探索

キャリア発達には成長 (0～14歳)、探索 (15～24歳)、確立 (25～44歳)、維持 (45～64歳)、解放 (65歳以降) の5つの段階で構成され、大学生は探索段階に相当する (Super, 1980)。そこには学業を含む複数の生活領域があり、クラブやサークル活動、友人との交流、アルバイトなども重要な領域とされる (湯口, 2020b)。先行研究では、大学生のライフスタイルが、キャリア意識や将来設計に関連することも指摘されている。例えば、学生生活はキャリア意識にとって重要と指摘したもの (梅崎・田澤, 2013)、バランスよく学業・クラブ・サークルをがんばる学生の将来設計が高いとしたもの (溝上, 2009)、課外活動への参加が職業探索を促すとしたものなどである (Denault, Ratelle, Duchesne, & Guay, 2019)。

このように、大学生の学生生活とキャリア探索は関わりが強いことが想定される。学生生活全般での様々な経験が学生にとってのライフキャリアとなり、キャリア探索と関連づいていくからである。

(3) 就職活動とキャリア探索

日本独特の新卒一括採用は大学生の進路選択に大きな不安や悩みを与えている。「私立大学学生生活白書2018」によれば、最も多い不安・悩みの1位は「就職や将来の進路」(44.2%)で

あり、2位以下の「授業などの学業」(24.5%)、「友人などとの対人関係」(23.6%)を引き離れた。さらに、「就職できるかどうか」(48.7%)は、不安の第1位を維持しつつも減少傾向にあり、「就職すること自体」(31.5%)は、前々回(24.9%)から大きく増加している(日本私立大学連盟, 2018)。

湯口(2021)は不採用経験を乗り越え、就職活動の取り組みを継続することで、キャリア探索が内定先への積極的な態度を形成するレディネスとなったことを示唆している。キャリア探索を継続しながら就職活動という壁を乗り越えた経験は、社会移行直前の大学生にとって大きな意味を持つだろう。

(4) 本研究の目的

大学生にとってキャリア探索が重要なことは明らかであるが、国内のキャリア探索研究は質問紙を利用した量的調査(安達, 2008, 2010; 若松, 2012; 湯口, 2020a, 2020b, 2021)であり、質的内容に踏み込んではいない。キャリア探索は自己と環境の種類により異なる役割を持つこと(Blustein, 1989)などは明らかになってきているが、探索の種類ごとに学生の声を詳細に取り上げたものではない。大学生が転機となる就職活動に向けてキャリア探索をどのように継続し、課題に対処してきたのかは十分な検討がなされておらず、学生生活のどのような活動がキャリア探索につながっているのかも明らかになってはいない。

そこで、学生生活、就職活動をほぼ終えた大学4年生にインタビュー調査を実施し、学生生活、就職活動を通したキャリア探索について質的に検討することにした。本研究の目的は以下の二点である。一つ目は、キャリア探索の種類ごとにキャリア支援の課題を整理すること、二つ目は、学生生活の中にキャリア探索の促進要因にあたる活動があるかを探索的に検討することである。大学生が実際に行った活動を整理し、各キャリア探索の課題や促進要因にあたる学生生活の活動を明らかにすることで、効果的なキャリア支援の介入に役立つだろう。

2. 方法

(1) 調査時期及び調査対象者

複数私立大学の4年生に行った質問紙調査(湯口, 2021)において、キャリアインタビューに応じてくれる希望者募集の案内を質問紙に添付した(2018年11月~12月)。募集に応じてくれた学生の中から、2019年1月~2月の間で日程調整が可能な学生8名の内、7名を分析対象

とした(注2)。

質問紙調査の得点と合わせて表1に示す。本研究は研究・教育倫理委員会(X大学大学院心理学研究科)の倫理審査を受け、承認を得たものである。

表1 調査協力者の概略

	A	B	C	D	E	F	H
性別	男性	女性	男性	男性	女性	男性	女性
内定先	医療・福祉	メーカー	商社	教育	人材	メーカー	金融
大学生活で力を入れたこと	アルバイト	部活(運動部)	部活(運動部)	学生団体活動	部活(文系)ゼミ活動	ゼミ活動	アルバイト
情報収集(平均点)	4.25	2.63	3.88	4.50	5.00	4.25	4.50
自己理解(平均点)	5.00	3.75	5.00	1.50	5.00	4.00	4.75
キャリア支援活用(平均点)	3.75	3.00	4.50	4.50	4.75	4.25	3.25
実施時間	29分	29分40秒	38分43秒	36分04秒	49分32秒	37分28秒	27分45秒

* 学部は全員文系学部である

* 質問紙調査の全体平均値と標準偏差 (N = 232)

情報収集(平均: 3.46, 標準偏差: 0.767) 自己理解(平均: 3.86, 標準偏差: 0.802) キャリア支援活用(平均: 2.81, 標準偏差: 0.898)

(2) データの収集方法と倫理的配慮

表2に示すインタビュー項目に基づき、半構造化面接を行った。面接調査は大学内の個室で著者自身によって行われた。インタビューデータの取り扱いについては、上記研究・教育倫理委員会の倫理規定に則り、調査対象者に事前に説明を行って同意を得た。インタビューは、調査対象者の権利を侵害することのないよう適切に遂行した。調査に関する面接平均時間は35分26秒であった。発言内容はI Cレコーダーで録音し、著者により逐語録を書き起こした。

表2 インタビュー項目

-
- (1) どのような学生生活を送ってきたか
 - (2) 学生生活での体験は、将来の職業選択につながっているか
 - (3) キャリア探索を始めたきっかけ
 - (4) キャリア探索が促進された理由は何だと思うか
 - (5) 就職活動をどう頑張ってきたか
 - (6) 就職活動で困ったこと、支えや力になったこと
 - (7) 内定後の今、これまでを振り返って必要だと思うこと
 - (8) その他
-

(3) 分析方法

逐語録を読み込み、①キャリア探索、②キャリア探索をはじめたきっかけとされる活動の発言部分を抽出した。得られたインタビューデータは、①キャリア探索発言部分の内容を分析して類似したものを統合し、構成要素を整理・分類した上でサブカテゴリー化した。サブカテゴリーについて、質問紙調査（湯口，2021）で使用したキャリア探索の因子構造（情報収集・自己理解・キャリア支援活用）をカテゴリーとして対応を検討した。②キャリア探索をはじめたきっかけとされる活動も、同様の方法でサブカテゴリーを設定し、類似する要素にまとめてカテゴリー化した。最終的にこれらの関係性を図解して文章化し、解釈を行った。分類は研究実施者を含むキャリア研究者2名により行われた。

3. 結果

分析の結果、45の発言が抽出された。わかりやすくするため、カテゴリーは【 】で示し、サブカテゴリーは『 』とした。

(1) キャリア探索の種類ごとの整理

逐語録の分析の結果、キャリア探索に関連すると考えられる発言部分が抽出された。それらを検討して統合・分類し、14のサブカテゴリーを設定した。さらにキャリア探索の種類ごとの課題を整理するため【情報収集】【自己理解】【キャリア支援活用】をカテゴリーとし、発言部分のサブカテゴリーとの対応を検討した結果を表3に示す。

表3 キャリア探索の整理とカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容
情報収集	説明会などでの刺激	<ul style="list-style-type: none"> 説明を受けて、まあ、自分の思っていることと合致するなっていう。そこでもうひとめぼれみたいな感じなんですけど (A) 会社を調べたり、インターンシップだったり、説明会は全部参加するとか (H)
	情報不足を認識	<ul style="list-style-type: none"> 年功序列っていうか・・・。やっぱり今まで培ってきたものがあるから、なかなか変わらないから・・・。自分が意見を出しても、上まで上がらないとか (E) 軽い気持ちでエントリーシート出してWEBテスト受けて、絶対通るだろうなって思っただら、もう通らなかった・・・ (F)
	企業選択の基準	<ul style="list-style-type: none"> なんかこの人事変だなあとか、なんでこんなことできないんだろうって思った会社はやめとこうっていう風な基準にはなりました (F) その会社の人達の雰囲気とか、人事の方たちも気さくで、アットホームな会社だったので、ここなら頑張れるかなあって (H)
	働くイメージ	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション不足だったり、そういうのがあるとやっぱりチーム負けちゃうっていう、やっぱり組織力が大事で・・・ (C) 働き方っていうかその仕事内容もなんかダイナミックで面白そうやなって思っただら、いっぱい挑戦させてくれるかな (D) 「ぜひ来て」って求められて、それも嬉しかったってのもありますし、その自分の働いてるイメージっていうのがしやすかった・・・ (F)
	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 自分のことを知ってもらうためには、自分がまず自分のことを知らないといけない (A) なんか自分でこの限度というか、自分はあまりコミュニケーションが取れない人間なんだみたいな。決めつけちゃうと良くないかなって思っただら (D) 突撃するタイプの営業は無理だったので、証券とかけこう「話聞いてください」って急に行っただらっていうスタイルだったので、それは自分には無理で (H) (自分は) やってきたこととか結果とかはすごいことしてると思うけど、何やってきたか何もわからへん人だよなって。(E)
自己理解	親や友人の協力	<ul style="list-style-type: none"> 普段大学で仲良くしてる人と、中学、高校とかで仲良かった友達と、就職活動どう思う？他己分析どう？みたいな感じで振り返って (F) すごい親と仲良いと思っててもう家帰ったらすごいしゃべるんで、親にはもうほとんど、友達とかもわかってるんで、もう誰々さんと言ったらもう顔と名前が一致するぐらい喋ってるんで、やっぱり自分のこともかなり、分析も手伝ってもらった (F)
	自分の適性や能力の発見	<ul style="list-style-type: none"> オフェンスやったら冷静に、ディフェンスやったらちょっと荒々しくみたいな (C) 引越して6回ぐらいして、小学校上がる時に引越してするんで、中学には友達が0に・・・。高校の時も引越してするんで、高校も友達0になって、幼稚園の時もアメリカに行ったりして、0からスタート。 ゼロからスタートすることがすごく多かったんですけど、特に波風を立てることなくすぐに馴染むというか、すごく馴染む力は強いと思います (F) 事務作業自体は得意なんですけど、朝から夕方まで座ってっていうのが、ストレスになるから・・・。 動いている方がストレスにならないから。(H)
キャリア支援活用	価値観や希望条件の理解	<ul style="list-style-type: none"> 仕事探すときにもそういうなんか人の幸せにまあ、直結するような仕事したいな (A) 関西で勤務したいっていうのがあって、お金も大事なのである程度の初任給、初任給の高さと福利厚生、土日休みたいっていうのも前提条件にあったので (H)
	インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> 英会話とか会話していく中で、自分より上の大学生はいたんですけど、その人たちよりも喋れた・・・ (D)
	価値観を変える経験	<ul style="list-style-type: none"> 一年生の内から人脈を築く何か、これまでの価値観を変える何かを経験したほうがいい (D) 新しい考え方とか新しい価値観とか新しい人間関係とか、今まで大学生活、全然部活だけで (C)
	強制的な機会	<ul style="list-style-type: none"> 機会をちょっと強制的ぐらいでも作ってもらえたぐらいの方が (A) 流されると思うんですよ。周りがそうなので早めに環境をつくる。環境を変えてみてもいいですよ (D)
活用	社会人との交流	<ul style="list-style-type: none"> とりあえず、大人としゃべる数を増やそうと思って (C) 中小企業の社長さんに聞くことが多くて、話を伺っているとすごく楽しそうに、ワクワクしながら夢を語ってらして (F)
	支えとなる仲間	<ul style="list-style-type: none"> インターンシップとかで出会った人達がすごくこうみんないい人たちで、応援してくれたのは心の支え (A)
	情報不足や誤解による機会の喪失	<ul style="list-style-type: none"> マスコミを受けた時に「インターンに来とかなないと駄目だよ」って言われたので、行っただらいい職業もあるのだからって思ったんですけど (B) あんまりキャリアセンターに行かなかったんですけど、勝手に怖いっていうイメージを持っていたので。でも結果報告をしに行くときとかにすごく、親切にしてくださったりとか (B)

【情報収集】は、4つのサブカテゴリーが該当した。内、『説明会などでの刺激』『情報不足を認識』は情報収集のきっかけとなったことであり、『企業選択の基準』『働くイメージ』は情報収集の結果、気づいたことや確立されたものと解釈できた。

【自己理解】は、4つのサブカテゴリーが該当した。『振り返り』の結果、『自分の適性や能力の発見』『価値観や希望条件の理解』をし、『親や友人の協力』が【自己理解】のプロセスで重要な資源となっていた。

【キャリア支援活用】は6つのサブカテゴリーが該当した。いずれもキャリア支援の活用を促すものであったが、『インターンシップ』『価値観を変える経験』『強制的な機会』『社会人との交流』『支えとなる仲間の存在』はプラスの要因として、『情報不足や誤解による機会の喪失』はマイナスの要因として働いていた。

(2) キャリア探索を促進したと考えられる活動

学生生活と関連のある発言部分が抽出された。それらを分析して分類・統合し、8のサブカテゴリーを設定した。8つのサブカテゴリーを検討した結果、3つのカテゴリーにまとめられた。8つのサブカテゴリーの内、『役割と責任』『学生にしかできない経験』『挫折からの立ち直り』は、クラブ・サークル活動に関する発言であった。単に入会し、参加していることに留まらず、活動への関わり方が強かったため、【クラブ・サークル活動への積極的関与】と命名した。同様に、『苦手なことへの挑戦』『新しいコミュニティへの参加』『目的を持って過ごす』のサブカテゴリーも、学生生活に変化を起こすための行動に関する発言であったため、【変化を起こすための主体的行動】とした。『様々な人との関わり』『ロールモデル』のサブカテゴリーは、本人が新鮮に感じ、新しいステージに参加する感覚を得られる交流を示すものであったため、【異質交流】と命名した。これらは「学生生活におけるキャリア探索の促進要因」と位置付けた。結果を表4に示す。

表4 学生生活におけるキャリア探索の促進要因の整理とカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	発言内容
クラブ・サークル活動への積極的関与	役割と責任	<ul style="list-style-type: none"> ・上級生になるから甘えとっちゃあかんと思って、部活に対する取り組みというか、考え方を変えて (C) ・2回生でだいたい中だるみ。3年生になるともう、覚悟決めないといけないんで。 自覚・責任・来年もあるし (C) ・シーズンを通してのプランだったりも主体的に考えないといけないんで、そうなったときに自分自身がどうすべきなのか、自分の立場は何なのかっていうのを考える機会が多かった (C)
	学生にしかできない経験	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりサークル活動とかって大学生のするものって感じじゃないですか、大学生のうちにはできないことは大学生のうちにしといた方が (A) ・何回か部活、やらなかったらどうだったんだろうって考えたことあるんですけど、たぶん、くそみたいな人間になってんなーって思って (C)
	挫折からの立ち直り	<ul style="list-style-type: none"> ・1回手術してて、人生で9回骨折れてて、それでも大学.. 僕、高校までずっと野球部やったんですよ。 で、野球部をやりきって、大学4年間もずっとやりきって、それなりの根性はあるかなと (C)
変化を主体的にこなすための	苦手なことへの挑戦	<ul style="list-style-type: none"> ・大学時代になってその、好きなことばかりやってるんじゃダメだなんて思ったのがきっかけ (D) ・苦手なことに挑戦していくっていうのが大学4年間の目標だった (D) ・一番はその、アイデアを出さないといけないんですけど、なかなか難しかったですね。やっぱり普段あまり得意ではないので (F)
	新しいコミュニティへ参加	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで同じ価値観、同じコミュニティの中にいたと思うんですけど。関西の大学に来ることで元々高校の友達もそんなになんていんですよ。逆に一からスタートできた (D)
	目的を持って過ごす	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がやりたいことをほやっと生きるんじゃなくて、目的とかを持ったうえで、大学生生活過ごした方が有意義 (H)
異質交流	様々な人との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりいろんな人と関わったらそこからいろんな情報も入ってくるし、自分をこう見つめ直すきっかけとかも得られるので (A) ・自分と似たような人とは関わってこなかった高校時代と比べて、大学はいろんな人がいて (B)
	ロールモデル	<ul style="list-style-type: none"> ・本当にずっとその人が私の中でずっと一番の存在の人で、自分が落ちてる時に救ってくれるんですよ (E) ・自信がつくというか、自分についていいなという場所をつくってくれるような (E)

4. 考察

本研究の目的は、キャリア探索の種類ごとにキャリア支援の課題を整理し、学生生活の中にキャリア探索の促進要因にあたる活動があるかを探索的に検討することであった。

(1) キャリア探索

① 情報収集

『説明会などでの刺激』を受けるという行動の結果は、情報収集に関するプラスの要因と考えられる。一方、「軽い気持ちでエントリーシート出して WEB テスト受けて、絶対通るだろうなって思って出したら、もう通らなかった… (F)」というショックは、マイナス要因ともなり得る。しかし、『情報不足を認識』することが【情報収集】の必要性を痛感するきっかけになっていた。行動することで刺激を受けることもあれば、ショックを受けることもあるが、どちらも現実を直視することにつながったのだろう。【情報収集】を行うことで現実を受け止め、次の行動にどうつなげていくかが重要である。

【情報収集】の結果として、「気さくでアットホームな会社だったので、ここでなら頑張れそう (H)」「ダイナミックで面白そう (D)」といった『企業選択の基準』や『働くイメージ』ができてきた。

② 自己理解

「自分のことを知ってもらうためには、自分がまず自分のことを知らないといけない (A)」のように、これまでの『振り返り』から深く内省をすることで、「馴染む力は強いと思う (F)」「動いている方がストレスにならない (H)」などの『自分の適性や能力の発見』に至った可能性が考えられる。こういった『振り返り』には『親や友人の協力』も役立っている。その中で「突撃するタイプの営業は無理だった (H)」というような気づきがあり、「人の幸せに直結する仕事がしたい (A)」「関西で勤務したい (H)」などの『価値観や希望条件の理解』に至っていると考えられる。

一方、「なんか自分でこの限度というか、自分はあまりコミュニケーションが取れない人間なんだみたいな、決めつけちゃうと良くないかなって思って (D)」のように、自分の可能性を決めつけてしまうことへの危惧があり、【自己理解】に否定的な学生も見受けられた。学生 D は【情報収集】【キャリア支援活用】は全体平均より高い傾向を持つものの、【自己理解】得点

は1.5と著しく低かった。【自己理解】にマイナスのイメージを持っていたことが影響している可能性も考えられる。自分探しの旅に出たまま帰れなくなる若者がいるとして、自己理解の促進を強調しすぎるデメリットも指摘される中 (川崎, 2005a)、学生が不安に感じないようなアプローチを模索する必要があるだろう。

③ キャリア支援活用

『インターンシップ』『社会人との交流』などが、キャリア支援を活用する中で体験されていた。そこには「新しい考え方とか新しい価値観とか新しい人間関係 (C)」といった『価値観を変える経験』が必要だという発言があった。「インターンシップとかで出会った人達がすごくこうみんないい人たちで、応援してくれたのは心の支え」といった、就職活動を乗り越える『支えとなる仲間』も見出されていた。

一方、「マスコミを受けた時にインターンに来とかないと駄目だよ (B)」と言われたことや、「あんまりキャリアセンターに行かなかったんですけど、勝手に怖くなっていうイメージを持っていた (B)」という『情報不足や誤解による機会の喪失』なども見られた。この発言をした学生Bは、【情報収集】の得点が2.63であり、全体平均値3.46と比較しても低くなっている。このように、情報収集ができていない場合、思い込みによる誤解なども加わって、キャリア支援をうまく活用できない可能性も考えられる。

意外なことに「機会をちょっと強制的ぐらいでも作ってもらえたぐらいの方が (A)」「流されると思うんですよ。周りがそうなので早めに環境をつくる (D)」といった『強制的な機会』が必要との声も出ており、きっかけを待っている様子もうかがえた。職業選択においては、職業世界を探索した上で、絞る前にまず拡げていくことが必要との指摘もある (川崎, 2005b)。キャリア教育や支援の中で、学生に対して主体的なキャリア探索のきっかけをつくることが重要だろう。

(2) キャリア探索を促進した要因

① クラブ・サークル活動への積極的関与

「上級生になるから甘えとっちゃあかんと思って、部活に対する取り組みというか、考え方を改めて (C)」「2年生でだいたい中だるみ。3年生になるともう、覚悟決めないといけないんで。自覚・・責任・・ (C)」といった『役割と責任』を背負い、「大学生のうちにしかでき

ないことは大学生のうちにしといた方が (A)」といったように、サークル活動や部活の集大成として『学生にしかなできない経験』をあげている。その中には、「1回手術してて、人生で9回骨折れてて、それでも、(中略)やりきって、大学4年間もずっとやりきって (C)」といったように、ひとつのことをやりきるために『挫折からの立ち直り』を語る場面があった。学生 C はキャリア探索の【情報収集】【自己理解】【キャリア支援活用】のいずれの値も、全体平均より高い値となっていた。クラブ活動に自覚と責任を持って取り組み、何度も骨折するという挫折を乗り越える経験が、キャリア探索にも生きているのではないだろうか。池田・伏木田・山内 (2018) は、クラブ・サークル活動でのメンバーとの深いコミュニケーションや、学生活動への積極的な関与、目的意識を持った取り組み、内省を促すなどの4つの因子が、キャリア・レジリエンスに正の影響を与えると報告している。キャリア・レジリエンスとキャリア探索の関連も指摘されていることから (湯口, 2020a)、受け身で参加するのではなく、積極的に関与し、挫折してもやりきるなどの経験を有していることが、キャリア探索の促進につながる可能性も考えられる。先に述べた課外活動への参加が職業探索を促す (Denault, Ratelle, Duchesne, & Guay, 2019) という先行研究を支持しているといえるだろう。

② 変化を起こすための主体的行動

「これまで同じ価値観、同じコミュニティの中にいたと思うんですけど (D)」のように、『新しいコミュニティへ参加』し、環境に変化を起こす体験も語られた。「大学時代になってその、好きなことばかりやってるんじゃダメだなって思った (D)」などのように、『苦手なことへの挑戦』を行い、新しい世界へ飛び込んでいっている。「自分がやりたいことをぼやっと生きるんじゃなくて、目的とかを持ったうえで、大学生活過ごした方が有意義 (H)」といったように、何かこれまでとは異なる意識をもつようになった学生もいた。

このように、まだ経験していないことに挑戦する姿勢や、学生生活を『目的を持って過ごす』ことなども、キャリア探索を促進する可能性を示唆している。

③ 異質交流

「やっぱりいろんな人と関わったらそこからいろんな情報も入ってくるし、自分をこう見つめ直すきっかけとかも得られるので (A)」 「自分と似たような人とはしか関わってこなかった高校時代と比べて、大学はいろんな人がいて (B)」といった『様々な人との関わり』が刺激

となって、キャリア探索の促進に役立っていたことが伺えるだろう。また、「その人が私の中でずっと一番の存在の人で、自分が落ちてる時に救ってくれる (E)」といった憧れの存在『ロールモデル』など、これまで出会ってこなかった異質な交流が、キャリア探索を継続させていたと考えられる。ロールモデルはキャリア発達やキャリア開発に重要との指摘もあり (Hackett & Betz, 1981; Gilbert, 1985; Gibson, 2004)、今後注目すべき概念といえる。大学などの教育機関では教員や職員、カウンセラー、社会では上司やメンターが部下の育成を行う際などに、その関わり方を参考にできる可能性があるだろう。

5. 総合考察

ここまで、キャリア探索と学生生活から見たキャリア探索の促進要因を整理し、探索的に検討した。今後の研究に向け、カテゴリーとサブカテゴリーを図解しものを図1に示す。

キャリア探索の内容からは、促進するきっかけとなったものの他、キャリア探索を行った効果と考えられるものが含まれていた。【自己理解】【情報収集】と比較して【キャリア支援活用】は、『情報不足による機会の喪失』などがあり、『強制的な機会』を求める声もあったことが興味深い。自己内省的な活動は行動に伴うコストが小さく、探索行動として行われやすいとの指摘もあるように (若松, 2012)、【キャリア支援活用】は他者の力を借りるため、ハードルが高いことが考えられる。キャリア探索は探索行動を主体的に行うものであるが、強制的な機会をひとつのきっかけとして好意的に捉えていると考えられる。湯口 (2020a) は、1～2年生から【自己理解】を行っているものの、【情報収集】や【キャリア支援活用】は3年生になってから行動に移すという鈍い動きとなっていることを指摘している。キャリア教育や初年次教育、3～4年次ゼミなどを利用し、支援体制を整えつつ、ハードルが高いキャリア支援の活用を、学生生活の中に取り込むことが重要だろう。

キャリア探索を促進する学生生活における促進要因において、【クラブ・サークル活動への積極的関与】があげられた。単に続けていたということではなく、一つのことをやり遂げた経験や、何らかの役割や責任を全うするなどの経験が、将来の選択につながっているのではないだろうか。【変化を起こすための主体的行動】【異質交流】においても、ただ大学に来ているということではなく、これまでの行動の枠組みを超えた経験することが、キャリア探索につながっていくと考えられる。

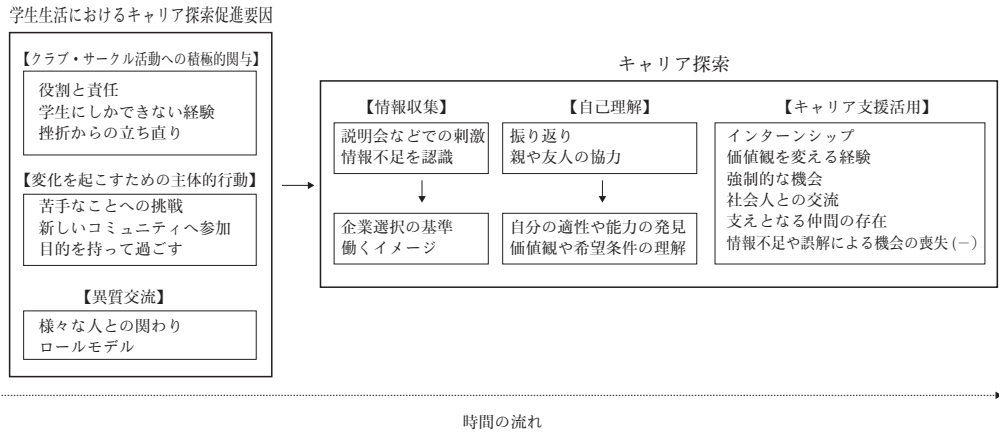


図1 キャリア探索の促進要因とカテゴリーに関する図解

6. 今後の課題

本研究の今後の課題として、以下の三点があげられる。第一に、インタビュー調査からキャリア探索の課題の一部は整理できたが、7名が語った中でのものであり、抽出されなかった概念があると考えられる。第二に、学生生活におけるキャリア探索の促進要因とされる活動に偏りがあることである。体験の語りには直接的な「学業」の話はほとんどなく、ゼミの話をした学生はいたものの、課外活動やアルバイトを頑張った学生がほとんどであった。また、呼びかけに応じてくれた協力者は、キャリア探索の得点が高い学生が多かった。

このことから、本研究の対象者にはやや偏りがあったことが伺える。そのため、本研究の結果のみをもって、キャリア探索の促進要因を明確にできたとはいえないだろう。今後は対象者の人数を増やし、キャリア探索の内容をより精密に検証していくことが必要である。

7. 注記

注1 安達(2008)は女子学生のみを対象とした調査では2因子、湯口(2020a)も大学1～2年生のみを対象とした調査では2因子を報告している。

注2 キャリア探索が活発である学生の場合、多くの経験を語るができると考えられ、促進要因につながる語りを引き出せる。キャリア探索を行わなかった学生の場合、何が阻害要因だったのかを確認することができると考えられた。そのため、キャリア探索の得点が質問紙調査の平均点と比較して大きく高低があった学生に連絡を入れた。除外した1名はその特

性から著しく独自性が高いと判断でき、キャリア探索とは異なる発言も多く見られたことから、本研究とは別に検討を行うことにした。

謝 辞

本稿の作成にあたりご協力くださった学生の皆様と、ご協力くださった教員の先生方に深く感謝申し上げます。

8. 引用文献

- 安達智子 (2008). 女子学生のキャリア意識－就業動機, キャリア探索との関連－心理学研究, 79, 27-34.
- 安達智子 (2010). キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81, 132-139.
- Blustein, D.L. (1989). The role of career exploration in the career decision making of college students. *Journal of College Student Development*, 30, 111-117.
- 中央教育審議会 (2011). 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」。 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2019年10月24日)。
- Denault, A. S., Ratelle, C. F., Duchesne, S., & Guay, F. (2019). Extracurricular activities and career indecision: A look at the mediating role of vocational exploration. *Journal of Vocational Behavior*, 110, 43-53.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity youth and crisis*, New York (WW Norton). (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1970). 主体性－アイデンティティ－ 青年と危機 北望社)
- Gibson, D. E. (2004). Role models in career development: New directions for theory and research. *Journal of Vocational Behavior*, 65, 134-156.
- Gilbert, L. A. (1985). Dimensions of same-gender student-faculty role-model relationships. *Sex Roles*, 12, 111-123.
- Hackett, G., & Betz, N. E. (1981). A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-339.
- Hirschi, A., Abessolo, M., & Froidevaux, A. (2015). Hope as a resource for career exploration: Examining incremental and cross-lagged effects. *Journal of Vocational*

Behavior, 86, 38-47.

池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平 (2018). 大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響 日本教育工学会論文誌, 42, 1-14.

Jordaan, J.P. (1963). Exploratory behavior: The formation of self and occupational concepts. In D.E. Super (Eds.), *career development; self-concept theory*, pp.42-78. New York: College Entrance Examination Board.

川崎友嗣 (2005a). 「時間的展望」から見たキャリアデザインとその支援 文部科学教育通信教育新社, 132, 22-23.

川崎友嗣 (2005b). 大学におけるキャリア教育の展開—学ぶ力と生きる力の教育—大学と教育, 41, 44-62.

溝上慎一 (2009). 大学生生活の過ごし方から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—京都大学高等教育研究, 15, 107-118.

文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために—

日本私立大学連盟 (2018). 「私立大学学生生活白書 2018」(pp.72-77). <https://www.shidaiaren.or.jp/files/user/4372.pdf> (2020年9月13日).

Savickas, M. L. (1997). Career adaptability: An integrative construct for life-span, life-space theory. *The Career Development Quarterly*, 45, 247-259.

Savickas, M. L. (2011). Career Counseling; American Psychological Association. (サビカス, M. L 日本キャリア開発研究センター (監訳) (2018). キャリア・カウンセリング理論 福村出版)

下山晴彦 (1998). 青年期の発達 教育心理学Ⅱ—発達と臨床援助の心理学— 東京大学出版

Stumpf, S.A; Colarelli, S.M., & Hartman, K. (1983). Development of the career exploration survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, 22, p.191-226.

Super, D.E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-298.

竹内倫一 (2012). 新規学卒就職者の組織適応プロセス—職務探索行動研究と組織社会化研究の統合の視点から—学習院大学経済論集, 49, 43-160.

梅崎修・田澤実 (2013). 大学生の学びとキャリア—入学前から卒業後までの継続調査の分析

—法政大学出版社

若松養亮 (2012). 大学生におけるキャリア選択の遅延—そのメカニズムと支援—風間書房

湯口恭子 (2020a). 大学生のレジリエンスとキャリア探索—各学年の違いに着目して—キャリア
デザイン研究, 16, 207-213.

湯口恭子 (2020b). 大学生のライフスタイルと社会的・職業的自立 近畿大学教育論叢, 32,
229-247.

湯口恭子 (2021). キャリア探索と就職活動中の取り組みが内定後の満足・意欲と不安に与え
る影響—大学4年生の回想調査から— ビジネス実務論集, 39, 11-22.

Zikic, J., & Klehe, U. -C. (2006). Job loss as a blessing in disguise: The role of career
exploration and career planning in predicting reemployment quality. *Journal of
Vocational Behavior*, 69, 391-409.

Zikic, J., & Hall, D. T. (2009). Toward a more complex view of career exploration. *The
Career Development Quarterly*, 58, 181-191.